

aacaフォーラム：「視る」意味をブラッシュアップする体験

第211回：虹色キューブ制作ワークショップ

第212回：都市のダイナミズム 空中回廊体験

フォーラム委員会

2026年初頭に開催された第211回および第212回aacaフォーラムは、「知覚の再発見」というテーマのもとに連続する体験として実施された。ひとつは手のひらの中の光を扱い、もうひとつは都市スケールの空間を歩く。スケールの差異を超えて、いずれも「視る」という行為そのものを更新する機会となった。

光の装置をつくる体験

1月25日開催の第211回フォーラム「虹色キューブ制作ワークショップ」は、「第2回aaca建築・美術・工芸作品展～会員の協奏～」と同時期にaaca事務局会議室で実施された。同一ワークショップを午前・午後の二回開催としたことで、出品者や来場者が作品展鑑賞の合間に無理なく参加でき、自然と会員同士の交流の機会が広がった。

講師・宮崎桂一氏による「虹色キューブ」は、アクリルキューブの各面にシアン・マゼンタ・イエローのフィルムを貼付することで構成される。シアンとイエローを重ねれば緑が現れ、三色が重なる部分では光が減衰し深い色調へと変化する。



宮崎さんのレクチャー風景



ワークショップの様子

多様なバックグラウンドを持つ参加者が一様に手を動かし、フィルムの配置や重なり方を試行錯誤し、自然光に透かし色の変化を確かめながら、日

常的に接するRGBの加法混色とは異なる「印刷などに活用されるCMYによる減法混色」を体感した。

完成したキューブは各自の試行錯誤の時間を宿す「小さな光の装置」として持ち帰られた。

高速道路を歩く非日常体験

3月9日の第212回フォーラム「都市のダイナミズム 空中回廊体験」は、2025年に廃止された東京高速道路(KK線)を歩行体験するものであり、通常は車両専用である高架道路に立つという非日常の都市体験であった。

当日は新橋口から京橋口まで約2kmを歩行。足元には走行レーンの痕跡が残り、視線を上げれば銀座・有楽町・丸の内・八重洲の建物群が通常とは異なる高さから連続して現れる。地上では賑わいが持続する一方で、KK線上には人影がなく、音も遠く。体感された幅員の広さも特徴的で、都市から一步距離を置いて眺めることで、今まで気づけなかったその輪郭や秩序、気配のようなものが浮かび上がる、いわば「都市の実相が立ち現れる感覚」とも言うべき体験であった。



都市の狭間のKK線

引率者からは、NHK紅白歌合戦における米津玄師のパフォーマンス撮影時の裏話などが紹介され、都市インフラが文化的舞台へと転用される具体像が共有された。また、デフリンピックにおけるマラソン利用の検討では「車両が存在しないこと」が安全性の観点から価値となると「従来とは逆転した評価軸」が示され、参加者に新たな視点を提供した。

第211回 開催日：2026年1月25日 / 講師：宮崎桂一さん / 会場：aaca事務局（東京・三田）
第212回 開催日：2026年3月9日 / 引率者：東京高速道路株式会社 井出恵士さん、鈴木淳さん / 視察地：東京高速道路（KK線）

さらに特筆すべきは、このKK線が公共事業としてではなく、民間主体の枠組みの中で成立し、運営されてきた点である。賃貸収入を基盤とした維持管理という仕組みは、単なるインフラを超えた「開かれた都市資源」としての可能性を内包しており、廃止後に遊歩道として再編される構想も含め、民間主導でありながら公共性を拡張していくダイナミズムが見て取れる。それは、社会に開かれた領域横断を志向するaacaの活動理念とも深く響き合う、都市の変容の一形態と言える。



誰もいないKK線

都市は固定された形態ではなく、機能の更新とともに意味を変え続ける存在である。KK線を歩くという経験は、その変化の只中に身を置き、過去と未来の交差点を実感する、稀有な機会となった。

「当たり前」を問い直す視覚の再発見

このように、小さな光のキューブと都市の上空の大規模インフラという対照的な対象でありながら、両フォーラムはいずれも「当たり前に見えているもの」を問い直す契機となった。視覚とは環境と身体との相互作用の中で生成されるものであり、都市もまた機能や文脈の変化に応じて意味を更新し続ける存在である。

本フォーラムを通じて得られたのは、新たな知識にとどまらず、世界の見え方そのものがわずかに変化する感覚であった。それは、建築・美術・工芸に携わる私たちにとって、最も根源的で持続的な価値を持つ経験であったと言えるだろう。

（委員長 萩尾昌則）